

| | |
|------------------|---|
| Title | 収益構造からみたチェーンストアの変遷 - 構造改革運動を中心として - |
| Sub Title | |
| Author | 林逸子(Hayashi, Itsuko) 伏見多美雄 |
| Publisher | 慶應義塾大学大学院経営管理研究科 |
| Publication year | 1989 |
| Jtitle | |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 修士学位論文. 1989年度経営学 第713号 複写許諾が必要 |
| Genre | Thesis or Dissertation |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001989-0713 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

収益構造からみたチェーンストアの変遷 — 構造改革運動を中心として —

本研究はチェーンストアの変遷を、収益構造という視点から分析したものである。本研究の中では時代を3つにわけ、モデルケースを用いてシミュレーションを行った。

まず初めの時代区分は、日本の高度成長期である。これは、チェーンストアが誕生してから高成長を遂げていた時代である。チェーンストアは「規模の経済」が効きにくいはずの「変動費型」の収益構造を持ちながら、チェーン展開という手法によって成長した。そして大量集中仕入により原価を抑えるというメリットを得たといわれる。店舗は与えられた商品を、ひたすら売り、売上を増大することを目的とした。旺盛な消費需要がこのシステムを支えた。

2番目の時代は、高度成長期の終えんから1982年までである。大店法の施行、オイルショック・ニクソンショックと、大きな転機が続いて訪れ、チェーンストアはその成長を鈍化させた。そして1983年2月決算では各社増収減益を記録するに至る。「消費は美德」の時代から「省エネ」時代へと環境は変化したにもかかわらず、高度成長期に成功した戦略や、大きくなった組織、それを支えるマネジメントシステムが適合できず、チェーンストアの収益構造が変わってきたことから起きたものである。

最後は、1983年以降である。業績悪化を目の当たりにして、チェーンストアは構造改革運動に取り組んだ。これは、在庫削減がテーマであるといわれたが、実際は、環境に適合しなくなった戦略を転換し、組織とマネジメントシステムを組替えるものであった。構造改革運動が、戦略と組織そしてマネジメントシステムをつなぐ役割を十分に果たしたとき、チェーンストアの収益構造はもっとも環境に適応したものとなる。